

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 安部公房：象徴性の超越と女性の役割 |
| Author(s) | デービッド ステース, |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，1991：147 - 155 |
| Issue Date | 1992-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039315 |
| Right | |
| Relation | |



安部公房 —— 象徴性の超越と女性の役割

デービッド・ステース

I 「あの穴はね……」

私が安部公房の作品を研究していると言うと、ある塾の校長が、「『砂の女』って、女はどうして穴に住んでいたのだろう。」と聞いた。少しためらってから、「まあ、穴は社会の象徴と考えていいと思います。」と答えた。「そのとおりだ！」と彼が叫んだ。「穴は社会です。」

この話題が無事に済んでほっとしたが、褒められたのに「穴イコール社会」という方程式には不満を持った。私の不満の原因は何であろうか。

安部の作品が象徴的なのは確かである。人物と舞台は大体不特定である。主人公は「男」とか、「彼」とか、「僕」などと呼ばれる。舞台は「病院」とか、「村」などである。この不特定さのために物語は寓話に近く、人物はどの人間でも象徴に見える。50年代からの短篇小説の『デンドロカカリヤ』には、「コモン」と名をつけるほどこの象徴の使い方が明確に現われている。

この不特定さに付け加え、象徴的な読みを除くと多くの作品がただの異様なありそうにないものの描写だけになる事もある。『棒』は実際に棒になった男の話だけに、『燃えつきた地図』は記憶喪失にかかった探偵についての小説になる。象徴性がないと『砂の女』のテーマは「狂気の村人に注意」か、「村の浸食」になる。しかし、この作品は明らかにそれだけでなく他面性もある。

安部の作品は象徴性が高く、その使い方を理解することが重要なのは確かだが、塾の校長への私の答えには不満がある。象徴の意味を解くだけならば、その作品は暗号のようになる。読者の仕事がただ暗号を解き、裏表紙の陳腐な広告の言葉——例えば、「魂を求め現実の物語」だとか「市民の疎外」など——を言いなおすことになるだろう。

安部は現実性と象徴性の緊張を保つことで、そんな平凡な表現を避けている。『砂の女』では、主要な象徴である砂が専門的な明細で豊富に描写されているので、ただの象徴としてみることはしがたい。小説の人物が「結局、世界は砂みたいなものじゃないか。」というほどその象徴性をはっきりしているのであるが、象徴性の上に砂が実在のものとして鮮明に描写されているゆえ、脳裏に焼き付くものである。「砂イコール社会」という堅いよみのかわりに、現実的な世界に読者を引き込むのだが、結局、象徴は高いのである。

この象徴性のある現実性は『デントロカカリヤ』とか、『詩人の生涯』とか、『ノアの方舟』などに見られるように、純粹に象徴的な50年代の短篇小説からの発展と言える。芥川賞をとった『壁』でさえ乱暴象徴の使用が明らかに見られる。例えば、化学的な理論

の象徴は単に「化学者」である。こんな作品は60年代の小説よりも暗号を解くような読み方が適当である。

象徴性を詳しく描写することはフランツ・カフカにも共通している。カフカと同じように安部も現実の中に象徴性を追求して、象徴性に現実性をプラスする。『人間そっくり』には安部自身がこの象徴性と現実性の緊張した釣り合いをこう記す。「いったい、この現実、寓話が実話に負けたせいなのか。それとも実話が寓話に負けたせいなのか。」

『棒になった男』の序論で、ドナルド・キーンは「寓話の意味を理解することが肝心だというわけではない。」と、直観的な読み方を提案している。キーンの提案と同じように次の探ってみたい点は、ただの象徴的、知的読み方が不足だと示している。それは陶酔できる性格を持つということである。

『人間そっくり』の解説では、福島正実がこう書いた。「この作品は一種独特な構造と雰囲気とを持っている。読者はそれに引きまわされ、めまいに似たものを感じずにいられない。」ある私の友達も他の言葉で同じ意味のことを言った。「安部の小説って、麻薬なしでようことのできる。」創造力が働くときに、精神が集中できる場所でよめば、日常的な論理が逸脱した空間へ引き込まれる。論理の引力の負担がなくなり、思考力が自由に浮かび、予想外な連想をする。

自分の経験からの例を挙げる。岡山の夏の猛暑の中で初めて『他人の顔』を読んだときである。語り手の自虐的自己分析の世界へ引き込まれ、小説の暗い雰囲気私の脳を染めてきた。語り手の歪んだものの見方がいかにも説得力があって、小説の論理は自分の「事実」の論理を置き換えた。読みおわっても、自分と知人を語り手の見方で見てしまうぐらいであった。

安部の小説の主人公は概して四つの心理的变化の過程がある。第一は驚き —— 「異常だ!」。第二は抗議 —— 「こんなこと、やってられない。」。第三は狼狽 —— 「正常って何だろう。」。第四は諦め —— 死とアイデンティティの欠乏。別の歪んだ正常も設置される。(安部の作品は単なる四つの段階よりも無論複雑なもので、この様式を無視したり、もしくは変様を伴うこともある。しかし独特だといってよいほど前述の様式はよく起こる。) 一種の「催眠術」とも言えるべきものを利用して、心理段階を読者に伝えるのが安部の独自の才能である。

「催眠術」の方法は大抵四つほどある。第一はすでに歪んだ状態をさらに歪めることである。例えば、『棒になった男』の第一章には男である鞆の中に虫である先祖が入っている。こんな歪曲が長編小説のなかで精密に描写されるとき、読者は元の関係づけが混乱してくる。もうひとつの方法は主人公の心理的な現実性である。心理状況が詳しく描写されている主人公が、実際に読者が現実生活で行動を共にしていそうな人物のため、読者は物語の中で起きる奇妙なことに関心を持たず、薄気味悪い雰囲気に引き込ませる。第三は心理的現実性を連想する。それは、キーンが『燃えつきた地図』の解説で書いた「ありそう

もないような出来事がいかにも日常的な状況を背景にしていることは安部の文学の特徴のひとつであろう。」というように、奇妙なことを、正常な事件のように描写することである。読者が自身をのりうつれるような人物が第一の段階に従う最初の驚き以外に何も驚かなかったら、正常の観念を失う。『密会』の主人公が「まるで廃品回収のトラックから逃げだしてきた虫食い人形一座の気違いパーティじゃないか。」というすばらしい描写を伝えてくれるのに、病院の奇妙なことには殆ど喫驚しないために読者も段々それが普通だという観念が備わる。第四の方法は取りつかれたように結末がなさそうな分析である。この方法ではのみこもうと努力する読者の日常的な論理が置換されるほど、安部は歪めた論理を徹底的に書き示す。『他人の顔』と『無関係な死』はその二つの例である。象徴性がある現実的な描写と同じく、この歪んだ論理的な書き方もカフカからひきついだものに違いない。しかし、他のどの技術よりも安部の独自の個性的な世界の見方が大事だと思う。作品がどんなにありえなさそうでも、作家にとっては実在のことらしいため、我々読者はそれに引き込まれる。象徴の意味を理解することを強調しすぎれば、混乱させる技能を見落とす可能性があると思う。隠喩や象徴を利用する意志は、それを直接に言うよりはっきりと鮮明にするためである。「催眠術」を使うことを通じて、混乱させるという安部の目的に注目する必要があると思う。

ここまでの概要を述べる。象徴性が大切であるが象徴性には現実性も含まれていて、ただの象徴ではなくて、「催眠術」の面もあるためにそれに心を許す読者にとっては、象徴の暗号を解くという、より複雑な経験をする価値があると思う。

安部の世界はいかにもやむにやまれずである。しかし、私にとって、それには欠点があるように思える。その欠点を第二章で探りたいと思う。

II 女の役割

安部の作品において、女はそれ自身が重要な訳ではなく、常に男でいる主人公の心理のための引き立て役である。一個の人間ではなく、性の対象になっている。従って、よく女が動物に置き換えられて描写される。女の性は束縛とアイデンティティーの欠乏の象徴として使われている。女の人口が51%であることを考えると、女の使い方、全般の人々の小説家としては認められないと思う。その特徴的な例である『砂の女』と『燃えつきた地図』と『密会』を検証してみようと思う。

※

『砂の女』は砂漠でアイデンティティーをなくしていく男についての物語である。しかし、題名の女は最初からアイデンティティーらしいアイデンティティーがない。その代わりに人間的な性格を除かれた受動的な性の象徴である。主人公の以前のアイデンティティ

一への固執を打ち砕く砂の力は、その女に強く関連している。

女が登場する瞬間から性的魅力を評価される。(性の点だけを評価することは、安部の描く殆どの女がされることである。次の『燃えつきた地図』ではこの点がもっと明白である。)最初、主人公が穴で泊まる夜、「目つきをべつにすれば、なかなか愛嬌のある顔だと思う。」と書かれている。これは比較的温厚な評価だが、女が最初から男を魅惑する対象として創造されている。詳しく心理的に描写されている主人公のように、実在の人のようにはならない。彼女の人生のことは(未亡人であって、家族が台風で死んだ)少しだけ書かれているが、それは妖女の役に反映される——「女はそのままの姿勢で、ランプの火を見つめながら、いつまでも作ったような笑いを浮かべている。どうやらわざとえくぼを見せつけているのだと気づき、おもわず体を固くする。身近な死について語った直後だっただけに、よけいにみだらに思われた。」。その魅惑的な役は次の引用ではさらに明確である。女に迫られている男はこう思う。「せっかく押さえていた気持ちをむりやり掻きたてられたようで不愉快だったのだ。しかし、彼の意志とは無関係に、何かが血管の中で勝手にふくれあがっていく。まるで皮膚にはりついた砂が、血管にしみとおりに、内側から彼の情感を削ぎ落としていくようだった。」。この一節は女の性と砂の区別を不鮮明にする。その二つが一つ力になって男の抵抗力を段々潰し、結局アイデンティティを失わせる。

第二の段階である抗議を満たすように、女をこの妖女として告発する。九章で男は、「畏のなかに、餌を仕掛けて……犬が猫みたいに、女さえいりゃ、すぐにとびつくかと思つて……」と思う。実は女は「餌を仕掛ける」ほど積極的なことはしない。彼女自身が餌である。従つて、受動的・動物的な特性を強調する言葉で描写されている。「奴隷……代弁者……受け身な沈黙……薄気味悪いほど素直……けもののような女……点のような心……人形……無邪気……おろかしい……三歳の子供が見せる、あの媚態……観念した犬のように無抵抗にうなじをたれた……」。そう描写されると、自分の性を使って誘惑するというよりも、存在そのものが誘惑するようである。従つて、女は鎖や綱と違って、存在することだけで監禁する穴と関連しているのは妥当である。砂も常に動いてはいるが、自発的に動いているわけではなくて、引力と風で受動的に動かされているのである。

しかし、30章のレイプに反抗するときには自発的な行為を表す。女の独立を示すこととして見られるが、私は別の考えを持っている。男が女をレイプできれば、穴の外で散歩する権利を男は得る。女の性が砂の世界に対する抵抗を潰す力の象徴だから、レイプはその力の支配を試みるのである。そういうふうに見ると、女の抵抗は独立の兆しではなく、結果的には男の自己を失うことになるのであるが、女の性を縛り付けることの不可能を示すことである。30章の末文には次のように書かれている。「すべてを任せきった、女の腕の中で、自分はすべすべした平たい河原の小石になるのだと思つた。残った部分は液化して、女の体にとけこんでしまひそうだった。」。

※

『砂の女』と同じように、『燃えつきた地図』に登場する主要な女の「依頼人」は人間的人な人ではなく、ただの受動的な性の対象と束縛の象徴になっている。

先の小説のように、「依頼人」は登場してからすぐ性的魅力の評価される。探偵は依頼人のアパートで初めて対面すると、肌とか脊柱とか胸などを詳しく描写し、「もしかしたら、美人だったかもしれない」と考える。そういうふうには性的魅力を評価されない女はこの小説には殆どいない。

人の格好に注意することは、小説のモチーフとなっている観察と探偵の仕事の一部である。しかし、男の場合は大まかに描写され、例えば、ある労働者は「ずんぐりとして、肉付きのいい」大腿とか尻などの詳細なものが入っていない。そして男は性的魅力を評価されない。この特徴を示す一つの例は、探偵が初めて小説の主要な舞台である「つばき」という喫茶店に入る場面である。喫茶店のなかにふたりがいる —— 主人とウエイトレス。主人の格好は「はれぼったい顔」ということ以外何も書かれていない。しかし、ウエイトレスは「調査の対象外である」と思われているのに、次のように描写され、そして評価される。「小太りで、丸顔、目が小さく、頬にニキビのあとが目立つ。柄物のストッキングをはき、派手好みだが、はなはだ見栄えのしない小娘。」。

他の例は労働者を相手にする売春婦の描写である。「女どもだって、あんた、飯場暮しのおかげで、木の股にでもつつこみたくなった連中でもなきゃ、あそこが頭を下げて、にげだしちまうようなカスばかりだ……それが稼ぎ頭なんかになると、馬の穴も顔負けよ、さあ、何人でもかかってこいってんで、自分はあるの最中にでもぐうぐう舐めをかきながら、百万円も貯金した奴がいるって話だぜ……」。それは語り手ではなく、板前の言葉だが、いつもより粗野に表現されているのに、その女に対する見方は安部の作品には例外ではない。上の引用を見ると、次の『砂の女』からの文を思い出させる。「うつぶせになった裸の女の後ろ姿は、ひどく淫らで、けものじみていた。子宮をつかんで、裏返しにでもできそうだ。」。人間の特性を除かれた人は、獣と殆ど同様であるので、安部の作品の女が動物になぞらえるのはとても自然なことである。

『燃えつきた地図』には、そんな動物的な女が非常に多い。例えば、図書館の女子学生がいる。「太い足首の下に、ひびの入った、黒い平底の靴が、いかにも体重をもてあましている感じだ。膝の裏のくぼみだけが、なんとか娘らしい、清潔な陰を作っている。」。彼女は探偵のセックスの相手として拒絶され、次の文で小説から姿を消してしまう。「とり残された女子学生は、呆然と、冷凍庫の魚みたいに、ただ表情もなく立ち尽くしている……」。そして、モデルのサエコ —— 「片方の脚がほとんど太股の上までむきだしにもいるなる。顔からも、あのレンズで歪められた写真からも、まるで想像もつかない、見

事な脚……たつぷりとした肉付きだが、胴のしまりが悪く、多少水っぽい感じだ。ちぢれた、薄い下腹部の影には……」。探偵の妻を手伝っている娘の例もある。「美人というほどではないが、はなやいだ、しかもあどけない顔立ち……割れ目が見えるほど、びったり尻に張りついた、枯葉色の短いスカート……腰の筋肉の動きの一つ一つが、克明に、直接手に感じられるほどだ……口笛を吹いてやるのを待っている、小鳥のようにあけっぴろげな、無邪気な目つき。」。探偵の妻でも、頭のいい独立した人なのに、性的魅力の評価を避けられない。「短めのスカートからのぞいている、膝小僧は、この前会った時よりも、またこころもち肉付きが良くなったようだ。」。『燃えつきた地図』の女は、性がなかったら、女自身も完全にいなくなるのと同じである。

女に対しての動物的な描写に従って、探偵はヌード写真の女の「蛙の指の間の膜」に取りつかれる。これは女性器という意味の美辞である。失業し、妻と別れ、自分の一生の「地図」が燃えつき、探偵にはこの「蛙の指の間の膜」が依頼人と彼女の夫のアイデンティティーへの誘引の表象になる。探偵は夫のジャージを着て、夫の代わりに初めて寝室に入る時に、また「蛙の指の間の膜」が強く浮かんでくる。「まだ寝乱れたままになっている、白いベッド……敷布の中の、彼女のくぼみ……鼻血でふさがれているのだから、匂うわけではないのだが、それでもはっきり嗅ぎとることができるのだ……中心から、わずかに壁ぎわによった、彼女のくぼみ……ぼくのための、眠りの容器……ひろげた蛙の指の間の紫色の膜」。『砂の女』の女と連想している砂の穴と同じように、膜とか、くぼみとか、容器などの依頼と連想しているものも、女の性の受動的な力を示す。

「蛙の指の間の膜」の写真の女の身元は不明である。これは大切な点である。なぜならば、女性器は特定の個人のものではないなら、一般的な女の性の象徴になるからである。

小説の最後の部分でも、不明瞭さが肝心な点である。喫茶店のウエイトレスはだれなのか。又は行方不明になった夫としても見られるか。ヌードの写真と同じように、この辺はそういう不明瞭さのために、特定の人というよりも、一般的な人間についての物語になっている。換言すれば、象徴性と現実性の緊張した釣り合いを保つ安部の技巧に従って、最後の部分では、語り手の記憶喪失によって引き起こされる不明瞭さを使うことで、現実性に象徴性を入れている。安部による50年代の寓話的な小説に登場する不特定な人物と同様に、語り手と喫茶店の女が、この世に存在するすべての人間の象徴に見えてくる。最後の部分に至までの女に対しての見方は、安部の見方ではなく、探偵の見方だと認めたとしても、最後の象徴が高い部分は安部自身の見方だと言っても良い。

男のアイデンティティーと女の性は密接に関連しているから、語り手は女を拒絶つする方法でアイデンティティーを拒絶するのが論理的である。記憶を失い、ポケットから出したメモの番号に電話をかける。喫茶店を見た、あの女を誘惑するのがアイデンティティーのカギだと思った。その女が語り手のことを知っているらしく、迎えにくるが、語り手は隠れる。「探しだされたところで、解決にもなりはしないのだ。今ぼくに必要なのは、自

分で選んだ世界。自分の意志で選んだ、自分の世界でなければならないのだ。彼女は探し求める。ぼくは身をひそめ続ける。」。もしそれがアイロニーでなかったら、この「自分の意志で選んだ世界」は安部の作品のなかでは例外である。「そう、すべて自由意志だと思込ませることが、何といってもいちばんの安全弁ですからね。」と言った『誘惑者』の登場人物の見方の方が特徴的である。

しかし、束縛と女のつながりは例外ではない。『砂の女』では裸の女を「錠前」と呼ぶほどこの接続をはっきりと示す。その小説には、女の性は主人公のアイデンティティと自由の欠乏の原因の一つになる。『燃えつきた地図』には、主人公が女の性的魅力に抵抗することで、一種の歪んだ自由を得る。二つの場合は共に、女がただの性の対象になった、消極的なテーマの役である。

『燃えつきた地図』に出てくる女が性の対象のみに見られる理由は、主人公がヘトロセクシュアルの男であるからだと反論する人がいるかもしれない。女を評価するのは小説の現実性の一つの部分であると。しかし、この小説に限ったことではなく、安部は一般的にこの女に対する見方を超越しない。また、女に対する見方はうわべだけのものではなく、『砂の女』と『燃えつきた地図』で見たとおりに、テーマの構造にはめこんでいる。

※

『密会』の主人公の妻は、違う種類の対象である。すなわち、主人公の搜索の対象である。女自身が重要なのではなく、男である主人公のための引き立て役という様式が、又ここで見られる。『燃えつきた地図』では、行方不明になった夫は不思議な人物であるが、『密会』で行方不明になった妻はそれほど意味を持った人物ではない。妻がどんな人かときかれたら、主人公は「ミス東京の地区予選まで行ったりしたので、専門家が写した大きなカラーの水着写真なんかもあるんだ。」と言う。人物というよりも妻はただの体のようなのである。

小説の最後には主人公が妻を見捨てる。それはなぜであろうか。安部の世界では人間関係は結局無意味だからであるし、また見捨てるのが第四の段階である諦めにしがつているからでもある。しかし、多くの男にレイプされ、「傷をつけられた品」になり、妻の役として不適當だという可能性もない訳でもないと思う。レイプの犠牲者を「傷をつけられた品」として見るのは多くの国の文化に見られることである。この場合には適切かどうかはよくわからないが、もしそうなら、安部の性の対象としての女に対する見方に合っている。

しかし、妻の代わりに、いつもの安部の受動的な女とはかなり違う人物を探りたいと思う。それは警備主任の秘書である。彼女は、独立した、頭のいい、意志の強い人物である。これは安部の女からの逸脱に見えるが、注意深く見ると以前と同じ様式がある。

秘書は権力を持っていることは持っているが、その権力の源は性のみである。一例を挙げると、彼女は警備の若者たちに命じて警備主任を殺させることに成功したのだが、その代償を若者たちにセックスで支払うのである。主人公は、「もし想像どおりだったとしたら、彼女の支払い能力には限りがないことになる。ずいぶん危険な爆発に周りをうろつかれているわけだ。」と言う。前の二つの小説の分析で見たとおりに、女の性は消極的な力である。動物的描写も前に見たとおり——「まるで甘やかされた子猿じゃないか。」。

警備の若者たちに対しての秘書の権力には限りがなく、病院での勤め口も性のおかげで見つけることができた。秘書は異様なセックスの実験に参加した時にレイプされたのに、そのまま実験を続けたから、警備を手伝う仕事を得たのである。権力を得ることのできる勤め口があるために、秘書が他の安部の作品の女と区別されているようだが、実は女の性が、前は穴のように受動的に利用されながら、今度は積極的に利用されている。しかし、女の性は前と同じように消極的な力である。

『密会』においての女を性の対象として分析するときには注意しなければならない点がある。それは、『密会』が好色文学のパロディ—のような小説であって、性的にグロテスクな男と女が何人もいるということである。例えば、二本ペニスをもつ馬男とか、手淫に熱狂した当直医とか、意識を失っている患者のペニスを遊び道具にする看護婦たちなどがいる。しかし、男の場合は歪んだ性が単独の性格ではない。例えば、馬男は病気と社会の本質についての漫談を言っているけれども、秘書の会話は常にセックスのことから離れていない。彼女は会話中に突然「私の部屋によっていけない」とか、「手淫してみせてくれない」などによく言う。そして八号室の娘は手淫をするか、触ってくれと頼むこと以外殆ど何もしない。娘も秘書と同じように動物的に描写さ——「いきなり娘が猫の鳴き真似れるをした……球形の尻には手のひらの触角に目覚めを促す磁石のような力がある。」。

前の二つの小説のテーマは、アイデンティティ—に対して自由でありながら、『密会』では性と病気である。安部は特徴的に、テーマを伝える、最後の表象として女（例の娘）を選ぶ。「溶けてしまった骨の周りに幾層にも肉や皮がたるみ、どこが股間の壁なのか、もう正確にはわからない。ぼくは手に触れる鬩を探ってはさすりつづけた。」。

私は高校の頃から安部の作品を読んでいる。彼の小説に出会い、自分の脳のなかの奇怪な部分を発見することができ、深く感謝している。象徴性を超越したように、女性に対しての狭い見方を超越できたら、どんなにすばらしいことだろう。

安部はまだ作品を書いているそうである。今度は心とか、自由とか、アイデンティティ—に関する問題などを持つ女を書いてくれるだろうか。次の小説の題名は何であろうか。『砂の男』はどうであろうか。

※

次の人々に心から感謝したい。上田順一、藤本敦子、大西幸之助、相原和邦先生、広島国際会議場の図書室の職員の方々、そしてステーブ・テートンの顔を持つマーク・ミラー

。

※

文献

- 安部公房、『R62の発明・鉛の卵』、新潮出版、昭和32年11月
安部公房、『砂の女』、新潮出版、昭和37年6月
安部公房、『人間そっくり』、新潮出版、昭和42年1月
安部公房、『燃えつきた地図』、新潮出版、昭和42年7月
安部公房、『壁』、新潮出版、昭和44年5月
安部公房、『無関係な死・時の崖』、新潮出版、昭和49年4月
安部公房、『密会』、新潮出版、昭和52年12月
安部公房、『友達・棒になった男』、新潮出版、昭和62年7月